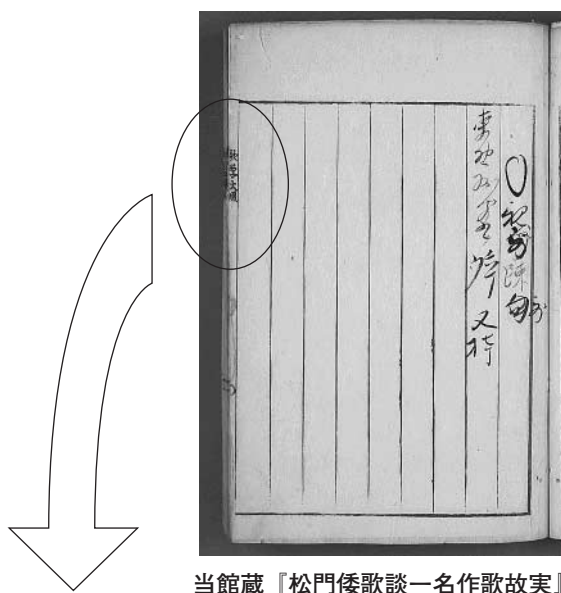


## 途絶した『歌学大成』—その用箋のこと—

松本 智子 (特別資料室)

### 1. 歌学大成用箋について

当館の貴重書の中には、下の図版のように、料紙の柱に「歌学大成」と刷られた用箋を使用する資料が存在する(次頁表参照)。これまでに確認された8点はいずれも小山田与清の自筆本で、内容は『歌学大成』ではなく、ほかの内容が記されるか、あるいは遊紙とされるなど、全く別の用途に利用されている。紙のリサイクルである。



当館蔵『松門倭歌談一名作歌故実』



小山田与清 (おやまだ ともきよ、1783-1847) は近世後期の学者であり、本学の創立に尽力した高田早苗 (1860-1938) の曾祖父にあたる。与清の自筆草稿類が高田家より当館に多く寄贈されてお

り、先の8点もこれに含まれる。与清は2万巻あまりの典籍を書庫“擁書楼”に蔵し、そこには大田南畝・平田篤胤・谷文晁など多くの文化人が集ったことはよく知られている。

与清の著作は、『国書総目録』によると304種に及ぶが、未刊のものも多い。『歌学大成』もその類と考えられ、現在、無窮会専門図書館(請求記号神習10697、以下「無窮会本」と略称)に草稿本一巻が残るのみである。

無窮会本には凡例があり、それを書いたのは与清の門人篠原善一(生没年未詳)である。善一は文政9年(1826)7月に刊行された与清著「歌詞考」(『松屋叢考』所収)の挿絵を書いており、「師命を奉り模写した」とあることから、既に文政9年以前に入門していたことが知られる。また、与清家の歌会にも参加しており、与清の『倭学戴恩日記』(当館蔵、ㄨ6-5759)天保2年(1831)9月14日条には「篠原善一 富士見御宝蔵番篠原弥兵衛男貞蔵」として善一の和歌が残っている。

6丁にわたる善一の凡例から、『歌学大成』作成の目的や経緯をうかがうことができる。意約すると以下ようになる。

与清は、歌を詠む人、特に初学の人のために書いた良い書物がないのを不満に思っ、長年広い視野に立った正しい書物を作ろうと、資料を博搜し様々な事項を抜き出しておいた。その量は長唐櫃二・三棹ほどになってしまったけれども、自分の名の上がるにつれ、門弟も増え、諸所の貴人からの招聘もあるため、多忙きわまりなく、手も触れずそのままとなっていた。それを善一は目にするたびに勿体無く思い、「かの書物はどうするのですか」と与清に質問すると、与清は次のように言った。「今の忙しさでは、刊行はいつのことか分からない。無駄に紙魚の住処になるかもしれないし、塵になってしまうのは悲しいので、公務の合間を使って思うままに書き整えてみよ」。善一も毎日公務に追われる身のため、成し遂げるのは簡単ではないが、そうかといって(このまま無駄にもしておけない)」と思い、日々、夕方から日暮れにかけて与清のもとへ

行き通り、例の抜書を分類し、読み、考え、これを作成した。

このようにして第一巻は善一により編集されたのである。この無窮会本の内容から判断するに、『歌学大成』は歌語辞典と考えられるものである。

## 2. 出版目録および広告から

『歌学大成』について記した出版目録のうち、早いものとしては、文政3年（1820）2月刊行の『草縁集』（当館蔵、A2-4313）に付された文生堂と耕文堂による「蔵板目録」がある。『擁書漫筆』など26点の広告の最後に『歌学大成』が掲げられ、以下のような宣伝文が記されている。

歌学大成 松屋高田大人著 五十巻 近刻

哥よみ文かくべき故事又はおもしろき詞ともをあつめ、證哥をあげて詩学大成円機活法などの体に考証。正しくものせられたる書也。歌学者流此書を懐中秘とせば万巻の書をみしにおなじかるべき大有益の書なり。（濁点、句読点は引用者による。以下同。）

2ヶ月後の4月に刊行された『勸善録』（当館蔵、ロ9-2142）の広告にも、「歌学大成 五十巻未刻」と記され、同年10月には書林勝村治右衛門より出された『墓相小言』（無窮会専門図書館蔵、請求記号神習9625）の広告に「松屋高田先生及社中著書目録」があり、そこには「歌学大成 松屋高田先生著 五十巻 未刻」に続いて、先の『草縁集』とほぼ同じ宣伝文が記載されている。『歌学大成』は遅くとも文政3年には全50巻の刊行が予定されていたと言えよう。

ただ、文政3年2月の時点では「近刻」であった『歌学大成』が4月には「未刻」となっている点は注意してよい。刊行を公表したものの、すぐに停滞したのであろうか。その後の、出版目録や広告に『歌学大成』が記されることはなかった。

ところで、当館所蔵の資料以外で歌学大成用箋を用いたものに茨城県立歴史館蔵『小山田与清遺稿』（請求記号5-26）がある。これも当館の資料と同様、『歌学大成』とは別の内容が書かれており、その中に与清自筆による文政10年（1828）の記述があることから、それ以前には既に『歌学大成』の作成は途絶して、準備されていた歌学大成用箋は本来の用途を失っていたことが知られる。

用箋を準備した背景には50巻刊行という遠大な

計画があったはずであろうが、巻一の草稿はできたものの、完成には至らなかったのである。

## 3. 残された用箋

『歌学大成』の刊行が途絶したのはなぜか。与清の日記は文政3年2月14日から天保2年までが欠けており、刊行が途絶したであろう時期の動向を知ることができない。今のところ理由は不明と言わざるを得ないが、善一著『治政談』の跋文（著者不明）には、善一について「年経て身をいためしはぶき出る病にかゝり久しくなやまれけり」と記されるほか、病気がちであった様子がかげがえる。想像の域を出ないが、実質的な編集を担っていた善一の健康上の理由があったのかもしれない。何れにせよ、「万巻の書をみしにおなじかるべき大有益の書」となるはずの『歌学大成』は水泡に帰し、用箋だけが大量に残されたのである。

50巻分の用箋とはどのくらいの枚数であろうか。無窮会本一卷が全30丁であることから概算すれば1500枚ほどが必要になる。現在確認できる用箋の枚数は、当館所蔵資料と茨城県立歴史館蔵『小山田与清遺稿』を合わせても約600枚、全体の3分の1強に過ぎない。

江戸時代の学者の著書には、刊行予定を公表しながらも未刊であることは多く、与清の著書の場合も例外ではない。ただ今回の例のように大量の用箋を準備していながら途絶した例は、与清の著作の中には他に見当たらず、特異な例と言えよう。

それにしても、残された用箋を使う与清の気持ちはどのようなものであったのだろうか。

資料名	請求記号	用箋枚数
松門倭歌談一名作歌故実	A4-5047	76
松屋棟梁集	A2-4772	293
衣手日記	X6-5760	13
律令便蒙	73-6610	22
水葱考	C14-2292	17
松屋筆記	A5-1397	4
松屋外集 二編	A5-1398	42
松屋反故集	A5-1406	79
	合計	546枚

〈表：歌学大成用箋を使用した当館所蔵資料〉